

日本陸軍航空史 (その7)

～日華事変 (1)～

1 はじめに

日華事変は、昭和12年(1937年)7月7日に発生した盧溝橋事件に端を発します。我が国は紛争を拡大する気はありませんでしたから、北支事変と呼称しましたが、戦場が中支に移ったことにより、9月2日から支那事変と称するようになりました。これが正式名称です。そして、大東亜戦争が始まると、昭和16年(1941年)12月12日、昭和12年7月7日に遡って全体の呼称を大東亜戦争と閣議決定されました。

現在、多くは日中戦争と呼ばれていますが(日米開戦時に、蒋介石が対日宣戦布告をしています)、ここでは、私が高校生時代から愛用している日本史辞典(数研出版(株)、昭和39年6月発行)にかろうじて残っている『日華事変』という名称を使用させていただきます。

2 日華事変勃発と拡大の理由

華北の中立化を図ろうとした日本に対して、国民政府は、共産党や軍閥と手を結び、反日運動を繰り広げ始めました。『マオ(上)』(ユン・チアン著)には、日華事変を策した黒幕は、スターリンだと書かれています。彼は、張治中という国民党の中いた共産党スパイの将軍を使って日支の全面戦争を仕組み、日本軍がソ連の方を向かないようにしたとしています。

盧溝橋事件については、極東軍事裁判で、劉少奇が「中国共産党がやった。責任者は私だ」と言ったそうですが、2005年の北京テレビ台の番組で、「第29軍に潜入していた共産党地下組織員吉星文、張克侠、何基澧らが引き起こし、まんまと抗日戦争へと発展させることに成功した」と報道されたといえます。

6月19日に元防衛研究所主任研究官・永江太郎氏の講演を伺いました。その際の配布資料です。これは、軍事化学院軍事歴史研究部が発行した『中国抗日戦争史 上巻』(1991年10月)の写しです。

長、团长均先后到卢沟桥附近，对丰台日军演习进行指导。7月6日，驻丰台日军无理要求通过宛平城到长辛店一带去演习，中国驻军不许，双方坚持10余小时，至晚日军始退回丰台。

① 面对日军的挑衅，中国第29军加强了抗战的准备。中共北平地下组织和进步人士到第29军宣传抗日，激发了广大官兵的爱国热情。宋哲元军长曾于5月召集部下商讨抗日对策，采纳了副参谋长张克侠提出的加强抗日思想教育和情报工作等项建议，以及“以变为守”的作战方案。该军还于五六月间组织了多次防御演习。

② 与此同时，加强了卢沟桥地区的防御部署，抽调第37师第110旅(旅长何基澧)第219团(团长吉星文)接防宛平与长辛店地区。该团接防后，即以加强的第3营(步兵连4，轻迫击炮、重迫击炮、重机枪连各1，共1400人，营长金振中)部署于宛平城和卢沟桥一带；以第1、第2营和团部集结于长辛店地区。该团官兵“宁为战死鬼，不当亡国奴”，抗战意志高昂。

二、日本挑起“七·七”卢沟桥事变

人们预料中的卢沟桥事变终于发生了。1937年7月7日19

② 二天，中国共产党就发表了号召人民奋起抗战的宣言。宣言指出：“日本帝国主义武力侵占平津与华北的危险，已经放在每一个中国人的面前”，“只有全民族实行抗战，才是我们的出路！我们要求立刻给进攻的日军以坚决的反击，并立刻准备应付新的大事变。全国上下应该立刻放弃任何与日寇和平苟安的希望与估计。”① 同一天，红军将领致电蒋介石，表示“红军将士，咸愿在委员长领导之下，为国效命，与敌周旋，以达保卫国土之目的。”② 当日，红军将领还致电宋哲元等，支持第29军抗战，“愿为后盾”。③ 7月9日，中国共产党代表周恩来等前往庐山会见蒋介石，共商抗日救国大计。7月13日，毛泽东在延安召开的共产党员和工作人员会议上，勉励大家“完成一切必要的准备，随时出动，到抗日前线。”④ 在中国共产党的号召、组织和影响下，全国各族、各界、各阶层人民积极行动起来，抗日御侮，支援前线，鼓舞了第29军广大官兵守土抗战，奋勇杀敌的信心。7月21日，中共中央发出《关于目前形势的指示》。指出：“事变的发展有两种可能的前途，或者是事变发展为积极的抗战，以至发展到全国性的抗战，……或者是由于冀察当局的让步，由于南京对于发动全国性抗战的迟疑及英法的态度而暂时求得妥协。”指示提出：“我们的总任务，是在争取第一个前途的实现，反对一切丧失任何中国领土主权的妥协。”⑤ 23日，中共中央又发表了《为日本帝国主义进攻华北第二次宣言》。指出：“平津冀察的存亡，千钧一发。我们应该向全世界宣言，我们对于日本帝国主义的侵略，再不能有任何让步与妥协了！”并号召所有中华民族的儿女们：“紧急动员起来，拼着我们民族的生命去求得我们民族的最

① 中央档案馆，《中共中央文件选集》第11册，中共中央党校出版社，1991年版，第274页。
② 《中共中央文件选集》第11册，第278页。
③ 《中共中央文件选集》第11册，第279页。
④ 《解放周刊》，第1卷第1期。
⑤ 《中共中央文件选集》第11册，第295页。

— 10 —

軍事科学院軍事歴史研究部は、我が国の防衛研究所戦史部にあたるそうです。以下は永江先生の説明の一部です。

1 行目は、7 月 6 日で、盧溝橋事件の前です。①は、「日本軍の挑発に対して中国第 29 軍は、交戦準備をし終わった」とあり、「中共北京地下組織の人たちは、29 軍に行き、盛んに抗日を宣伝した」とあります。そこで、29 軍の人たちは、愛国的熱情に盛り上がりました。

「攻めるを以て守るとなす」という作戦方針のもとに、部隊は、5 月、6 月の間に、度重なる防御演習を実施し、同時に盧溝橋地区の防御部署を増強しました。37 師団 110 旅団 219 連隊の第 3 大隊を盧溝橋に置きましたが、その兵力は、歩兵 4 個中隊、軽迫撃砲・重迫撃砲・重機関銃各 1 個中隊、合計 1,400 人、指揮官(大隊長)は金振中少佐でした。

③には、「7 月 9 日、周恩来は、廬山に赴いて蒋介石と会話し、抗日救国大計について協議した」とあります。そして、7 月 13 日、毛沢東が延安に共産党員の工作員らを集めた会議の席上、「勉強をして、一切の必要な準備は完了した。順次出動して抗日戦線に至れ」という命令を出しています。中国共産党は、盧溝橋事件を発端にして、いかにこれを拡大するかということを考えていました。

『マオ(上)』には、8 月 13 日に発生した上海における戦闘について、張治中が、蒋介石の不拡大方針を無視して日本海軍の艦艇に先制攻撃をかけたと書かれています。また、「8 月 15 日、蒋介石はやむなく対日徹底抗戦を決意し、総動員令を下した」とあります。

インターネットのフリー百科事典『ウィキペディア』によりますと、作戦計画をドイツの軍事顧問団が作成し、蒋介石がこれを実行したことから、日華事変が始まったと書かれています。

3 各国の航空機工業力²⁾

昭和 11 年 4 月時点における各国の軍用機の状況は次のとおりでした。日本の総合航空戦力が世界的に見て、いかに低かったかが分かります。これではアメリカに勝てません。

	米国	英国	佛国	獨国	伊国	蘇聯	日本	支那
製造会社数	87	36	48	25	17	4	8	0
中隊数	147	106	167	120	170	250	52	17
飛行機数	13,139	3,297	9,413	4,078	2,443	5,000	1,800	約 450
航空予算*	261,264	470,607	2,416,523	?	96,743	?	70,000	?

* 昭和 10 年度予算で、各国貨幣の千単位。昭和 11 年の交換レートは、(米)1ドル=3 円 40 銭、(英)1ポンド=17 円 15 銭、(佛)1 フラン=21 銭、(伊)1 リラ=18 銭。

4 事変の経過¹⁾⁵⁾

(1) 軍隊の動員

7 月 7 日の日華事変勃発に伴い、当初は不拡大方針をとった日本も、7 月 25 日の広安門事件、7 月 29 日の通州大虐殺(通州事件)など、支那軍の攻撃が多発するに及び、居留民保護のために、8 月、華北に第 1 軍、第 2 軍(各 3 個師団)を送ります。

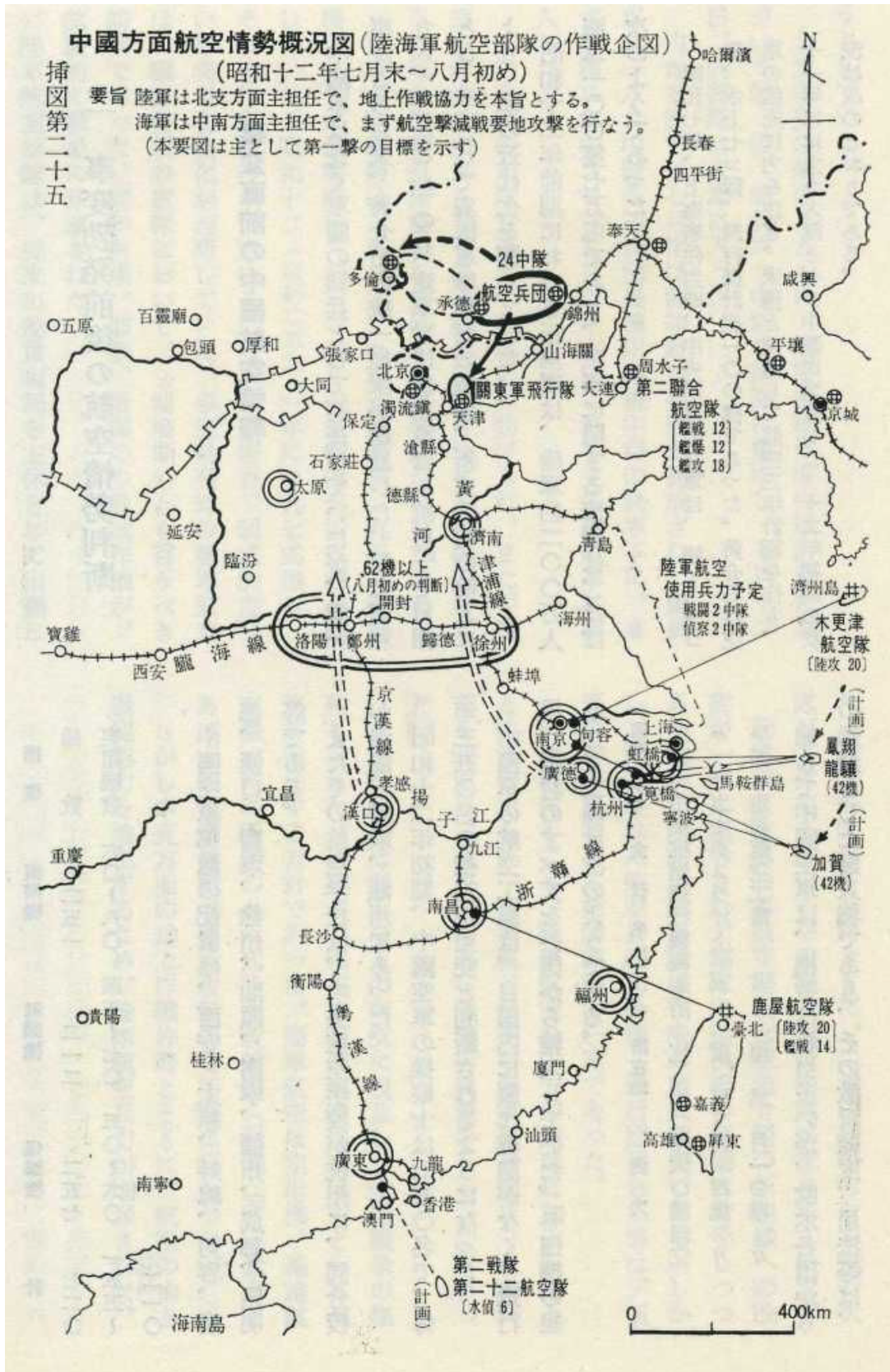
航空部隊は 7 月 26 日に、臨時航空兵団司令部、第 1・第 3 飛行団司令部、7 個飛行大隊及び 6 個独立飛行中隊から成る臨時航空兵団が、徳川好敏中将指揮のもと、北支(奉天、山海關、大連地区)に進出しました。これは、地上戦の前に航空主力で支那軍に一撃を加えるという考え方です。

派遣中隊数は、偵察 8(内地 6、満洲 2)、戦闘 7(内地 5、満洲 2)、軽爆 4(内地 4)、重爆 5(内地 3、満洲 2)で、合計 24(内地 18、満洲 6)でした。しかし、前例のない長距離飛行と、かなりの悪天候のため、当初の進出地京城に到着する前に、93 重爆×2、95 戦×9、94 偵×1、さらに約 10 機が行方不明となる事態が発生しました。これは、兵団長が京城から、「出発待て」と打った暗号電報を、日本の出発基地である

太刀洗飛行場の暗号解読班が、「出発せよ」と誤訳した結果でした³⁾。

派遣の結果、全 52 個中隊は、北支に 24、満洲に 13、内地、朝鮮、台湾に 15 という配置になりました。また、9 月中旬には、第 4 飛行団司令部と 1 個飛行大隊が、航空兵団に増派されました。

(2) 陸海軍航空部隊の作戦企図(昭和 12 年 7 月末~8 月初旬)²⁾(注:太線は陸軍、二重線は海軍)



(3) 日華事変初期の航空運用⁵⁾

○ 北支進攻時の航空作戦

7月11日、関東軍から飛行第15聯隊(94偵2個中隊)、飛行第16聯隊の1大隊(95戦2個中隊)、飛行第12聯隊の1大隊(93重爆2個中隊)が、支那駐屯軍の指揮下に入り、平津地方の戦闘、チャハル作戦に参加しました。

次いで、7月15日、臨時航空兵団の出動が下令されました。臨時航空兵団は、第1飛行団司令部、飛行第1大隊(94偵2個中隊)、飛行第2大隊(95戦)、飛行第3大隊(92偵)、飛行第6大隊(93軽爆、93重爆)、飛行第8大隊(95戦)、独立飛行第3中隊(95戦)、独立飛行第4中隊(94偵)、独立飛行第6中隊(95戦)、独立飛行第9中隊(94偵)、飛行場勤務中隊×2、高射砲隊×2、無線小隊×2、自動車中隊×1及び野戦第2航空廠(甲)から成りました。

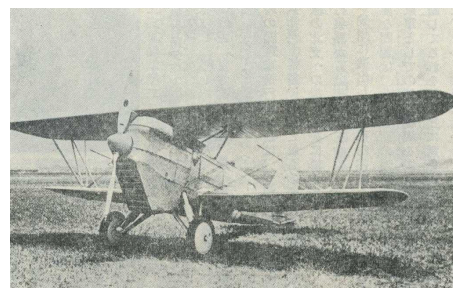
8月、陸軍は平津地方、チャハル(察哈爾)省方面を占領しましたが、支那軍に屈服の意図がないため、兵力を増強して、年末までに北支一帯を占領しました。航空兵団の作戦は、偵察、指揮連絡、敵陣地特に城壁の爆撃等、地上作戦直接協同が主体で、著しい貢献をしました。支那軍機は少数のゲリラ的攻撃を行ったのみでした。

○ 上海、南京進攻時の航空作戦

8月13日、上海で戦闘が発生しましたので、15日、陸軍は、上海派遣軍(第3師団、第11師団基幹)を送ります。しかし、8月下旬、10月上旬の2次にわたる攻撃は失敗したため、11月上旬、第10軍(第6師団、第18師団、第114師団基幹)を新編して、杭州湾に上陸させ、敵の側背を攻撃して、これを撃退します。

上海方面の航空作戦は海軍が主担任で、空軍的に運用されましたが、陸軍は9月、第3飛行団(独立飛行第4中隊(偵)、独立飛行第9中隊(偵)、独立飛行第10独立飛行中隊(戦)、独立飛行第11中隊(軽爆)、独立飛行第15中隊(重爆))を派遣しました。

9月21日、93重爆14機と95戦8機が陽高から発進、太原飛行場を爆撃しましたが、支那側は、7機のカーチス・ホーク(アメリカ製の新锐複葉固定脚機)で迎撃してきました。お互い1機ずつを失ったのですが(日本側は戦闘機の大隊長が戦死)、支那軍機の半数は、飛行学校の生徒を無理やり乗せていたといえますから、すごい能力を持った生徒たちでした⁴⁾。



カーチス・ホーク P-6 型戦闘機²⁾

11月中旬に大本営が設置され、12月中旬には蒋介石軍を屈服させるため、南京を攻略しましたが、漢口に後退され、和平工作の機会を逃してしまいました。11月以降は、南京や漢口攻撃の際、ソ連製の複葉 I-15 戦闘機と単葉 I-16 戦闘機が10数機で迎撃してきました。ソ連は、支那を支援するために、蘭州経由で、操縦士や飛行機を送り込んできました。

第3飛行団は、海軍と協同し、一部で上海派遣軍、主力で第10軍を支援し、搜索、指揮連絡、空輸、城壁爆破等に成果を上げました。

○ 徐州会戦時の航空作戦

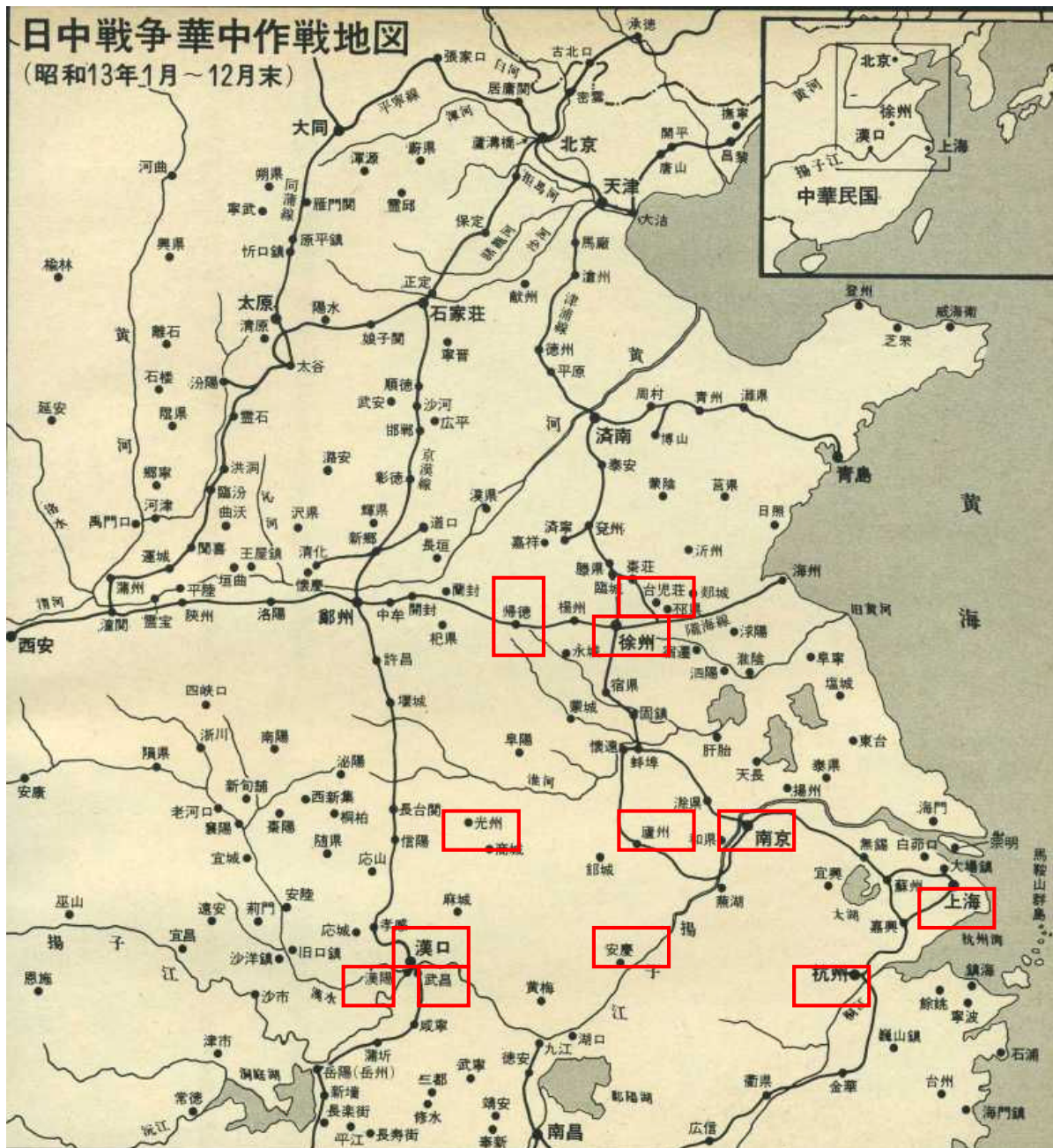
昭和13年5月、陸軍は、徐州北方の台兒莊方面に反撃突進をしようとした蒋介石軍約50万人に対して、北支方面軍の5個師団と、昭和13年2月編成の中支那派遣軍の3個師団の約20万人で、南北から包圍殲滅しようとしたのですが、兵力不足で敵に逃げられてしまいました。

会戦直前、飛行第2大隊、独立飛行第9中隊の95戦と97戦で、徐州西方150キロの帰徳上空において、約30機の敵と空中戦を行い、壊滅的打撃を加えました。航空兵団の出動は、1日平均150機でした。

○ 漢口進攻時の航空作戦

昭和13年9月から10月にかけて、陸軍は漢口作戦を行い、中支那派遣軍は、第2軍(第3・10・13・16師団等)で大別山脈の北側、第11軍(6・9・27・101・106師団等)で揚子江沿岸を進攻させました。

航空兵団は、第1飛行団(独立飛行第16中隊(偵)、第77飛行戦隊(戦)、第31飛行戦隊(軽爆))、第3飛行団(独立飛行第17中隊(偵)、独立飛行第10中隊(戦)、第45飛行戦隊(軽爆)、第75飛行戦隊(軽爆))及び第4飛行団(第64飛行戦隊(戦)、第60飛行戦隊(重爆)、第98飛行戦隊(重爆))等をもって、主力で第11軍、一部で第2軍に協力しました。昭和13年8月、飛行聯隊が飛行戦隊に改編されました。



日華事変関係要図(華中)⁷⁾

1 個独立飛行中隊/第 64 飛行戦隊が側面の支援を行いました。

支那地上軍の抵抗は韌強でしたが、日本軍は、ついに 10 月末、武漢三鎮(漢口、武昌、漢陽)を攻略しました。

○ 広東進攻時の航空作戦

昭和 13 年 10 月、日本軍は、広東作戦を敢行しました。第 21 軍(第 5 師団、第 18 師団、第 104 師団、第 4 飛行団等)を以て、バイヤス湾(広東南方 150 キロ)方面、一部で珠江方面から進攻し、軽度の戦闘ののち、10 月 21 に、広東を占領しました。

これは、遠距離渡洋上陸作戦であり、台湾からの陸軍航空支援は無理でしたので、当初の航空作戦は、海軍航空、特に空母戦力に期待しました。

第 4 飛行団(第 64 飛行戦隊(戦)主力、第 31 飛行戦隊(軽爆)、1 個独立飛行中隊/第 27 飛行戦隊(軽爆)、第 1 直協飛行隊)は、バイヤス湾に上陸直後、海岸付近に着陸場を設定し、陸軍機を推進するとともに、灶島(広東南方 120 キロ)の海軍飛行場に偵察部隊を派遣して作戦の当初から偵察任務に就かせました。広東攻略は、予想以上に迅速に行われました。

○ 重慶・蘭州爆撃⁴⁾

昭和 13 年 12 月 26 日から重慶爆撃、昭和 14 年 2 月 12 日から蘭州爆撃が行われました。重慶は蒋介石が逃げ込んだ所で、蘭州はソ連から SB 双発爆撃機、I-15 型・I-16 型戦闘機、その他の軍需品を支那に供与する中継基地でした。爆撃隊は、97 重爆と伊式重爆(伊・フィアット社製の双発 BR20 型)の混成で、1 回の爆撃には約 30 機が参加しました。出撃したのは漢口の飛行場でした。

奥地(重慶・蘭州)爆撃は、戦力立て直しのため、昭和 14 年 3 月 15 日に中止されました。

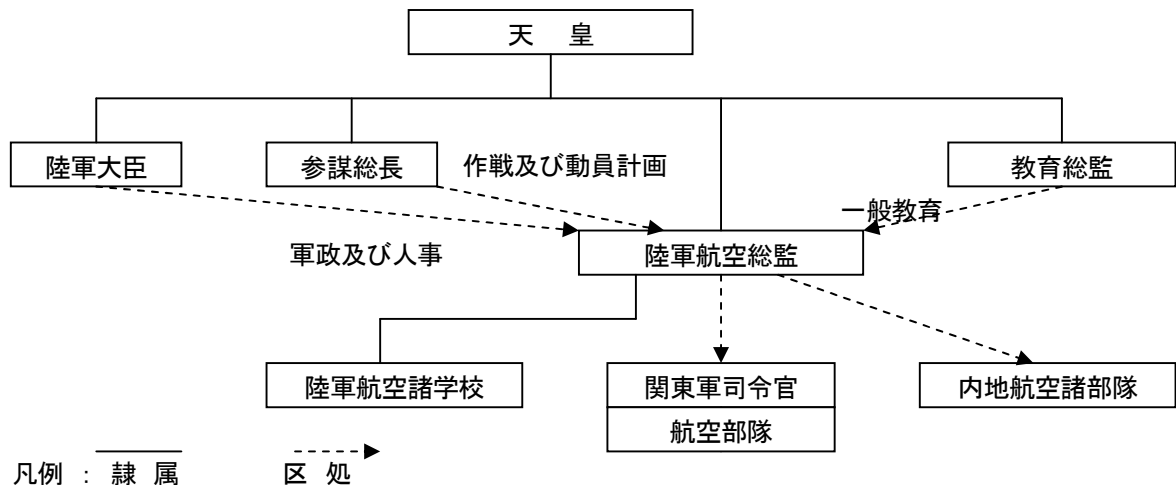
5 陸軍航空総監部の新設¹⁾⁵⁾⁶⁾

昭和 12 年航空充備計画にはありませんでしたが、航空部隊の急激な増加や航空要員教育所要の急激な増加に対し、航空部隊に対する教育の監督を強化し、航空教育の斉一化を図るため、昭和 13 年 12 月 10 日に陸軍航空総監部が創設されました。初代総監は、東條英機中将でした。

日本陸軍の三長官は、陸軍大臣、参謀総長及び教育総監でしたが、そこに天皇直属の 4 番目の長官ができ、航空兵科の独立という形ができました。しかし、航空総監は、三長官の所掌する業務について、三長官の区処を受けることになり、3.5 長官体制という形になりました。



東條英機中将
(写真は大将時⁵⁾)



航空総監部は、総務部と教育部から成り、編制定員は42名でしたが、ほとんどが、陸軍大臣の下にある航空本部部員との兼務で、二位一体という形でした。そのために、教育と軍政、特に器材行政をうまく表裏一体とすることができました。最後の航空総監は阿南惟幾大将で、航空総監部は、昭和20年4月18日に廃止され、陸軍航空総軍が編成されることとなります。

6 航空士官学校の独立²⁾⁵⁾⁶⁾

昭和12年航空充備計画完成時の定員は、将校約4,000名(うち、操縦1,400名)、准士官・下士官10,600名(うち、操縦2,600名)で、昭和12年の実員は、将校1,020名(うち、操縦350名)、准士官・下士官1,960名(うち、操縦560名)でした。

操縦者を910名から5年後に4,000名にするのは、損耗を考慮すると至難の業でした。また、操縦教育は若いうちに着手したほうが容易であることから、航空士官学校の新設が力説されましたが、教育総監の強硬な反対で実現しませんでした。

やっと、昭和12年10月1日、航空士官候補生教育専門の士官学校分校が所沢に設けられ、次いでこれが昭和13年5月7日に、建設中だった新校舎がほぼ完成したために、豊岡(現在の入間基地)に移転し、同年12月に、航空士官学校として独立しました。初代校長は、木下敏中将で、最後の校長は、徳川好敏中将でした。最初の卒業生は、昭和14年の51期生95名で、最後の期は昭和20年入校の60期生でした。

豊岡は昭和16年に、天皇陛下から、『修武台』と命名されました。ちなみに、座間の陸軍士官学校は、昭和12年に『相武台』、朝霞の陸軍予科士官学校は、昭和18年に『振武台』という名称を賜っています。



陸軍航空士官学校本部
(現在の空自入間基地)
(インターネットから)

7 支那軍機が台湾及び日本本土を空襲

常勝の日本軍を震撼させる事件が起こりました。支那は、米、英、仏、独、伊、ソなどから飛行機を買い漁っていましたが、それを使って台湾や日本本土を攻撃したのです。

○ 台湾爆撃⁹⁾

昭和13年2月23日の午前と午後、1~2機(なぜこれが概数なのか私には分かりません)、が台湾に来襲し、台北及び新竹飛行場付近を爆撃しました。我の迎撃は不成功でした。

○ 熊本県攻撃⁴⁾

米マーチン社の139型双発爆撃機(B-10の輸出版)を『馬丁』と称した支那軍は、米国人操縦士を締め出し、これに支那軍操縦士が3人ずつ、2機に乗り組みました。4人乗りだそうですので、重量を軽くするためだったのか、本当に操縦士がいなかったのか分かりません。

重慶から漢口を経由した馬丁機は、上海付近の寧波(ニンポウ)飛行場に隠密裏に着陸しました。彼らはすでに、暗黒の海上でも飛行できるように、計器飛行訓練を積んでいました。

そして、昭和13年5月19日夕刻に離陸した2機の馬丁は、高度3,000メートルで東北方向に飛び、5月20日午前4時ころ、熊本県人吉町の山林に宣伝ビラを投下し、南昌と攸県(ユージャン)に着陸しました。ほとんど人の住んでいない人吉に宣伝ビラを撒いたのは間が抜けていますが、何しろ弘安4年(1281年)の元寇以来の支那軍による日本本土攻撃でした。上空には十数分滞在したといえます。

「戦史叢書 陸軍航空の軍備と運用(2)」(昭和49年11月 防衛庁防衛研修所戦史室)によりますと、熊本・宮崎両県の上空でビラを撒いたとされています。

爆弾ではなくビラを運んだのは、行動半径の限界だったため、燃料を満タンにすれば、それしか積めな

かったからです。ピラには、「日本の労働者諸君へ！」という書き出しで、支那における日本軍の数々の残虐行為が書かれており、国民が日本軍の行動にブレーキをかけることを期待していたようです。

日本は、あとになって支那軍機が飛来したことに気づきましたが、報道を一切させませんでした。逆に支那では、新聞にデカデカと書かれ、二人の機長は一躍、英雄になりました。

○ 鹿児島侵入⁹⁾

昭和 13 年 5 月 30 日 21 頃、国籍不明機が侵入しました。爆撃やピラの事実は確認できませんでしたが、北支の航空兵団が、それを独国のハインケル He-111K 2 機だと判断しました。通信傍受から判明したのは、同機が、成都から漢口、南昌を経て、上海北西 70 キロの飛行場で準備を整えてから、出撃したということです。

8 戦闘体験による階級制度の改定⁸⁾

将、佐、尉、曹の呼称は、律令時代の伝統をにおわせるもので、明治以来、戦闘職種(兵科)のみに使用されました。軍医部門は、軍医総監(少将)、二等軍医正(少佐)、軍医(大尉)であり、海軍の主計科は、主計少監(少佐)、大主計(大尉)でした。そこで、海軍は大正 9 年(1920 年)、陸軍は昭和 15 年(1940 年)に、主計大佐、軍医大尉、衛生曹長という呼称に改められました。

「輜重輸卒が兵隊ならば、チョウチョ、トンボも鳥のうち」とバカにされた輜重輸卒は兵の階級の一つで、一応戦闘能力も付与されていた輜重二等兵の下位でした。服務期間が 2~3 カ月くらいだったといえますから、パート職員でした。

しかし、日華事変が始まって召集期間が長くなった関係上、進級をさせるために、輜重特務一等兵と輜重特務二等兵ができ、さらに、昭和 14 年(1939 年)には輜重兵に吸収されました。卒は江戸時代の足軽・同心を意味しますが、一等卒、二等卒が一等兵、二等兵に変わったのは、昭和 6 年(1931 年)でした。

おわり

次回は「ノモンハン事件」

< 参 考 文 献 >

- 1) 「陸軍航空概史」(昭和 39 年 7 月 航空自衛隊教育訓練資料)
- 2) 「戦史叢書 陸軍航空の軍備と運用(1)」(昭和 46 年 12 月 防衛庁防衛研修所戦史室)
- 3) 「日本陸軍航空秘話」(昭和 56 年 9 月 航空同人会陸軍航空史刊行会編 原書房)
- 4) 「陸軍航空隊全史」(昭和 62 年 9 月 木俣滋郎著 株式会社朝日ソノラマ)
- 5) 「陸軍航空の鎮魂」(昭和 54 年 3 月 2 版 航空碑奉賛会)
- 6) 「続 陸軍航空の鎮魂」(昭和 57 年 4 月 航空碑奉賛会)
- 7) 「1 億人の昭和史 日本の戦史 4 日中戦争 2」(昭和 54 年 8 月 毎日新聞社)
- 8) 「日本の軍隊ものしり物語」(平成元年 5 月 熊谷 直 株式会社光人社)
- 9) 「戦史叢書 陸軍航空の軍備と運用(2)」(昭和 49 年 11 月 防衛庁防衛研修所戦史室)